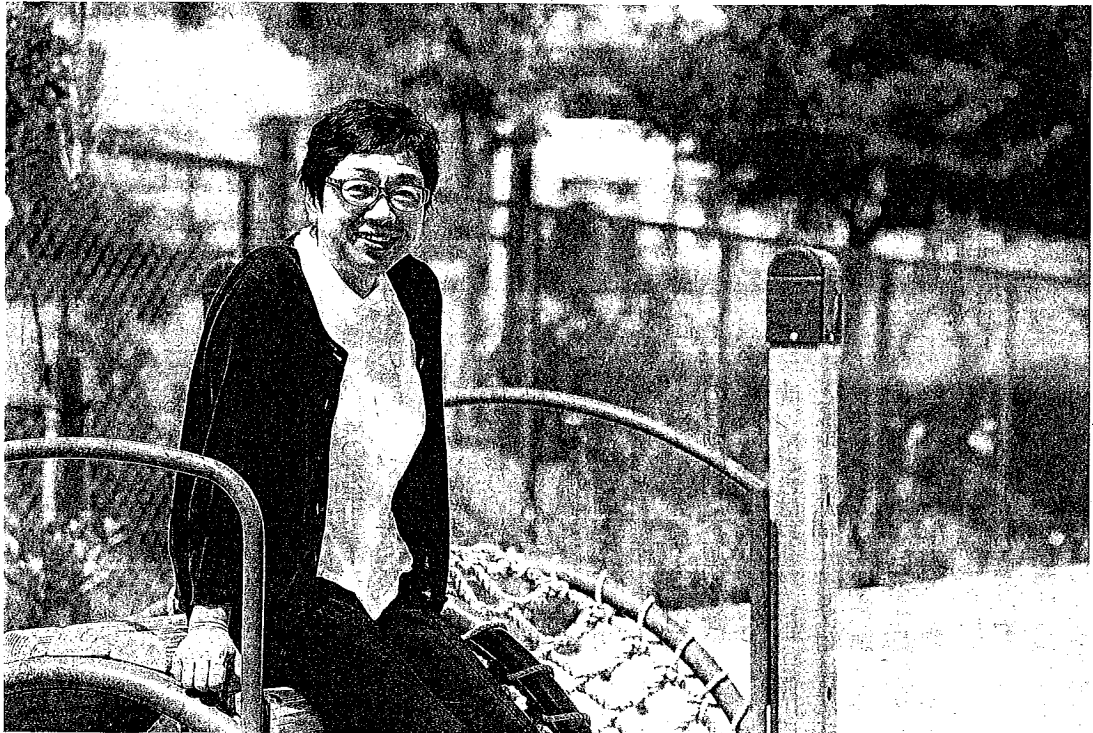


東京・神田神保町の書店で平積みされた「小倉千加子」の文字があった。フェミニストの書き手、小倉千加子さん(88)の最新刊「草むらにハイヒール」(いそっぷ社)だった。帯には「7年ぶりの新刊」とある。「週刊朝日」で2014年2月まで連載したコラム「お代は見てのお帰りに」を再構成したそうだが、何にせよ、ファンには待望の一冊。ペーシを惜しむようにめくり読み込んだ末、電話での5年ぶりのインタビューを試みた。

小倉さんは医学博士号を持つ心理学者。30代、松田聖子やテレビドラマなどを題材に世相を鋭く切り解き注目を集めた。大学教授をしていた51歳の時、教職を辞め文筆家として独立。「これで書くだけの生活ができる」と思ったのもつかの間、58歳の時に父母が運営する大阪府箕面市にある幼稚園(当時)を受け継ぎ、物書きから一転、こども園の学園長になった。

今月8日、電話越しに近況を聞くと「新型コロナウイルスでもう大変」と言う。「緊急事態宣言で私が運営する幼保連携型認定こども園も休園かと思いきや、違ったんです。いわゆる社会的機能を果たしている医療従事者や警察官らに加え、薬局やスーパーで働いている人の子は預かるようにと箕面市からも園からも指示されているんです」



—大阪府箕面市で2015年、幾島健太郎撮影

## 心理学者 小倉千加子さん

同じ制服で同じ教室にいて、午後2時に幼稚園が終わると、親が迎えに来る午後7時まで園内に残るんです。箕面市ではこのほか、1日4時間以上で週4日以上働くお母さんが『新2号認定』とされ、幼稚園の子を働かす園に子ども園に預けます」

頭が混乱しそうだが、非常事態の下では2号と新2号の子を預かるも全体の半数近くになり、普段よりも忙しいそうだ。

「新2号の子の所属は幼稚園なので、いま預かっているのは2号の保育園と幼稚園を混ぜることにかなり非常にやわごしい。休園だと幼稚園部門がなくなるので、保育専門の先生が全員をみます。ビデオを見せたり紙芝居をしたりしますが、幼稚園のような幼児教育はしない。でも、幼稚園の子もいるので、そういう子は先生も変わり、普段とは勝手が違うわけです」

放っておけば幼児はすぐに濃厚接触となるため、預かる側は神経を使う。「マスクやアルコール消毒、空気清浄機などで安全を保ち、子供は2メートル離れて給食を食べていますがちょっと大変です。向かい合わず横に並んで食べるよう指導しますが、子供ってうれしくなるとそばに立ってしゃべり出すし、遊び始めると先生にも友達にもべっぴん

きますが、無理に引き離せない。だから子供たちは誰一人感染していないと信じているしかない」

政府や自治体は密接を避けよと言いつつ、事実上、子供の世界でそれを強いている。「通勤電車に乗る人は怖いでしょうね。あれぞ『3密』密閉、密集、密接」なのに、やめようという。通勤電車と保育園。ここが一番接触しているのに、絶対になくなりませぬよ」

「女の人生すごろく」という著書もある小倉さんは、職業人から専業主婦まで女性が選べるを得ない分かれ道をすごろくにたとえてきた。実際に学園長として今接している母親たちにしても、その道はあれこれ枝分かれしている。このコロナ禍の

## 自分の人生自分のもの

新刊のタイトル「草むらにハイヒール」は歌人、栗木京子さんの短歌「草むらにハイヒール脱ぎ捨てられて雨水の響き宇宙たまり」を題材にした、元新聞記者で歌人の松村由利さんの解説をヒントにした。△女は

下でそれが顕著になってきた。先に触れた1号、2号、新2号の3種、つまり専業主婦にとどまるか長時間働くか、または短時間にするかで子供の預け先が三つに分かれる。さらに昨年10月に安倍晋三政権が導入した3〜5歳児の幼保の無償化政策で、今度は専業主婦に圧がかかってくるようになった。

「専業主婦の方は周りから長時間預けてもタダで、払うのは給食費だけ。働きに行かないと損するよ」と言われ、すごく悩むんです。1日1時間でも働けば預けられる市町村もあって、今、専業主婦に動揺が広がっています。仕事など見つからないと思っていれば、人手不足のせいで結構ある。そこにコロナが来たでしょ」。これまでの分かれ道のそれぞれに「親の就労か

草むらをごんごんと駆けていって、どこかへ行ってしまうのだ。あるいは、天に昇っていったのかも知れない」(語りだすオプジェ)という言葉だ。一部の主婦たちは昭和の頃、「有閑ママ」と呼ばれた。そんな「優雅で明るい虚無感」から飛び出し外へ、あるいは自分の内へと出て行く。自分の人生は自分のものなんだと励ます小倉さんの主婦への思い入れは、今に始まったことではない。富岡多恵子さん、上野千鶴子さんとの座談本「男流文学論」(1999年)で2人を相手に、すでにその思いを吐露している。谷崎潤一郎作品を語り合う中、「奥様」と呼ばれるような主婦にどこか冷たい2人に対し、小倉さんは「あの人たちは私よりもっと絶望の淵を見ている」と語り、それは過大評価だとその場で否定されている。

主婦たちについて、のんきでいとも自立せよとも言わず、一歩間違えれば壊れてしまいそうな内面の危うさを見ていた。その点を聞くと、明治38年生まれの2人の祖母の話をした。「父方、母方の祖母2人が同じ年で専業主婦。和服にかっぽう着姿でぬかみそをかき混ぜているような人たちが『本当に嫌だ』って言ってました。2人とも小学生の私に『三度三度ご飯炊いて、を永遠に繰り返すのが嫌や』。そもそも女であることが嫌だというのを私に訴えるから『自分の行きたい所に行ったらいいやん』って言ったら『電車なんて一人で怖くて乗られへん』って言うんです。『女が行っているのは子供の学校と、お寺だ

子の健康か」という二択が加わり、選ぶ道は多岐に割れる。「緊急事態宣言が出されてから、預かる子の数が徐々に減っていました。そこには親たちの困惑が隠れている。無償化に押されて正規の職にいた母親もいましたが、やっぱり家で子供を見るべきだと思いついたり、悩んだりしていると思います。在宅勤務になって子供を通わせない人もいますし、これを機に子のために家にいようと決めた人もいます」

物を書いていた頃は割と女性を分類し記号化して、ずばっと論じてきたが、「今は主婦と一言で言ってもそれに絡んだ回数、変数が多すぎて一般論では語れない。彼女たちを動かす世の中のメカニズムは比喩や一言では語れないとわかりました」。

「保育行政のおかしなところは、働かなければ家計が逼迫する主婦のための福祉という古い考えがそのまま残っているところ。仕事にありつけず子どもを家で終日世話し、ノイローゼになっている専業主婦のケアはしないのに、極端な例を言えば、銀行と証券会社のダブルインカム夫婦の子育てには予算をつける。家の中で途方に暮れているお母さんを助けなきゃいけないのに、逆さまですよ」

物書きという「虚業」から、教育や保育という「実業」に移って10年。一筋縄ではいかない家々の現実を日々目にする。原稿用紙を「マス」マス埋めていた頃が懐かしくなる。多忙な日々、「市役所の下請けをしているような、今の方が虚業じゃないか」ともなしくなる時もある。【藤原章生】